

---

# 使える！なるほど系怖い話

さすらいの旅猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

使える！なるほど系怖い話

### 【著者名】

Z5932M

【あらすじ】  
さすらいこの旅猫

怖い話です、なるほどーって感じになってくれればいいなあと

(前書き)

一人称視点の練習がてら、夏に合う怖い話です！  
に、するつもりが最後は感動物っぽくなってしまったかな。  
片手間に読める長さなので、暇があったら、ぜひ！

日もすっかり暮れてしまった。娘の6歳の誕生日だと叫ぶのに上司命令でしかたがなく仕事に出ていた俺は家に向かう歩調を早めた。本當なら、娘を遊園地に連れていくてやる予定だったのに。

俺は肩を落としながら、家に入った。

「ただいま～」

当然、娘もママも出迎えになんかは来ないだろう。予想はしてた。しかし、娘には出迎えてほしかった。あの笑顔で「お帰り！」を言われるために帰つてきていると言つても過言ではない。

「はあ・・・」

俺は溜め息をこぼした。何て言つてリビングに入ろう。リビングからは19：30から始まる人気アニメの音がしてくる。申し訳ない表情を作りながら、俺はリビングの扉を押し開けた。

「2人とも、今日はごめん！穴埋めは必ずするからっ！」

顔の前で両手を合わせて、精一杯謝る。娘とママは2人でテーブルにつき

夕食を取つてゐる様だった。当然、返事はない。2人とも、相当なご立腹の様子である。

しかたがなく、俺は仕事の疲れを癒すべく、風呂に向かうことじた。

「風呂入つてくる・・・」

大好きな娘には「お帰り」を言つてもらえず、おまけに2人揃つて無視してくるのだ。これは精神にかなり堪える。

その日は風呂を出ると、肉体的にも精神的にも参った俺はすぐ寝ることにした。

翌日は休日だった。朝起きて、食卓に着くと、俺の分が用意されていない。

流石に、むつとした俺は抗議の声を上げることにした。

「なあ、そろそろ許してくれよー穴埋めはしつかり・・と?」

ここで、一人がテレビのニュースに釘付けになつてゐることに気がつく。

列車事故が起きたらしく、行方不明者も大量に出て、続々と死亡者も発見されているというものだった。

これを観て、頭のどこかが痛むが、そんなことは気にしない。

列車事故なんて、今の俺にとつてはどうでもいいことだ。俺は再びママと娘に向かつて、苛立ちを感じ取られないように優しい媚びた声音で話かける。

「なあ、本当に悪かった、だから・・・」

言葉の途中で、娘が食事を終えて席を立つ。

「お母さん、じじいがいましたー」

「全部食べて偉いね～」

ママが娘の頭を撫でてころ。この話をきっかけに俺も混ざりつつじごくた。

「お、全部食べて、偉いだでーーー！」

と、娘の頭を撫でてもらひましたが、その瞬間、娘はお茶碗を片付けるために台所へと向かって行ってしまった。俺は呆然とした。まさか、ここまでとは思っていなかつたからだ。

その日一日はソファーで何をする事もなく過ごした。ただ空の一点を見つめていた。その日の夕食にも俺の分はなかつた。

耐えがたい苦痛が何日も何日も続いた。果てのない苦役を科せられていよいよ、俺は終わりない道を果てしなく歩いている気分だった。

遂に俺は自分を抑えることができなくなつた。ある日の夕食の時に俺の怒りは爆発した。

「いい加減にしろよ！謝つてるし、何日も何日も無視しやがって！  
陰湿すぎるんだよーーー！」

娘の視線が俺に向けられたことに気付いた。ママの視線も

俺に向けられている。良かつた、ようやく相手にしてくれる。  
そう思った時だった。

「パパは、まだこっち来ちゃダメ」

「あなたは、まだ頑張りなさいよ」  
と、2人は優しく微笑んでいる。

意味不明だった。何言つてるんだ？突如、2人の姿が光り始め  
それに伴つて視界がどんどんと明るくなつっていくのがわかる。  
どこからか女性の声がしてきた。

「～～さん～～さん！！しつかりしてください～～さん！」

俺の名を連呼している。この人は誰だ？

しかし、体が思うように動かないし、全身が痛む。頭には・・・  
包帯が巻かれている様だった。俺の様子に気付いたのか、目の前の  
見知らぬ

女性が声を一層と張り上げた。

「先生！患者さんの意識が戻りました！！」

俺はベッドの上で目を覚ました。病院独特の消毒液の臭いがする。

そして思い出した、俺は、誕生日の約束をすっぽかして  
次の日に穴埋めとして、家族3人で遊園地へと出かけていたんだっ  
た。

その途中で列車が・・・。

そうか、そういうことだったのか・・・  
溢れた涙が零れ落ち、頬を伝うのを感じた。  
頬にはいくつもの涙の筋が出来ていた。

END

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございました！  
一人称視点での物語りですが、どうでしたか？  
良ければ感想を頂けると嬉しいです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5932m/>

---

使える！なるほど系怖い話

2010年10月10日22時02分発行